

AJELC Newsletter

The Association for Japanese and English Language and Culture

第64号 2022年11月20日

		---目次---			
巻頭言	新谷 真由	1	第 80 回例会報告	鹿住 尚子	7
会長つれづれ考	小川 貴宏	2		村端 啓介	8
第 17 回年次大会	倉林 秀男	5		吉村 耕治	10
	馬場 哲生	6	事務局だより		11-12

アフターコロナの時代、学び方のパラダイムシフト

新谷 真由

2020 年の 1 月に我が国で最初の新型コロナウイルス感染者が発見されて以来、大学を始めとする教育業界にパラダイムシフトが訪れました。学生も教員も、未知なるオンライン授業に四苦八苦したのは記憶に新しいでしょう。我々の意思とは無関係に、直径 0.15 μm にも満たない小さな球体が外的圧力となり、ソサイエティ 5.0 が一気に推し進められた格好となりました。社会はアフターコロナへと向かい、大学教育もビフォアコロナと同じ教育設計では立ち行かなくなっています。

最初は何かと批判の多かったオンライン授業ですが、徐々に利点についても語られるようになりました。一番は、教育現場に柔軟性を与えたことでしょう。受講手段の多様化は、時空間の制約を超えた学習機会の

提供を可能にしました。また、LMS の機能向上や普及は、教員側に時間的な余裕を与えました。例えば、小テストの採点や集計に費やしていた時間は教材研究や授業準備の深化に割り振ることができました。

しかしながら、これでいいのかと疑問に思う項目もあります。それはオンライン留学です。2020 年から 2 年は国境封鎖という理由の元にこの制度が成り立っていましたが、アフターコロナに向かう現在も、私の所属先を含め、オンライン留学に注力する大学が増えています。留学経験は、その後の人生観に大きく影響します。私の例でいえば、一番の糧になったのは、現地での日々の生活の苦勞であり、そこから得た小さな成功体験の積み重ねです。また、異文化への接触は、自身のアイデンティティを内省するき

っかけにも繋がります。このため、留学には、勉強以上に多くのことが学べるメリットがあります。

少し話が逸れますが、私の指導教官の世代の留学には、私が経験した以上の苦労や学びがあったことは想像に難くありません。インターネットや交通網も発達しておらず、留学には決心が必要だった時代です。次に日本に帰るのは学位をとった後というのが普通で、街でたまたま日本語を耳にする機会があれば、郷愁を感じたそうです。しかし、私の指導教官のまた指導教官の時代は、海外渡航を望むことすらも難しかった時代です。「暮らしたことの無い世界の街並みや日々の情景をさも暮らしたかのように語るができる」のが真の学者の姿とされました。

ところ変わり、先日、私は所属先の校舎で、外国旗を掲げた複数のロボットが廊下をそぞろ歩くのを見かけました。付き添いをしていた学生に聞けば、グローバル PBL の一環で、操縦しているのは海外の学生達だそうです。簡単に海を渡ることができない今、遠隔で日本の大学を見物しているらしいのです。柔軟な発想に感心しました。どうやら、現代の学生たちは、私の指導教官のそのまた指導教官の時代から一周回り、「暮らしたことの無い世界」を実に卓越した方法で体験しているようです。そんな曾孫弟子達の学び方を一体だれが想像できたでしょうか。

(芝浦工業大学准教授)

会長つれづれ考

デジタル無双の若者たちに戸惑うアナログ昭和おやし

小川 貴宏

今の若い人たちはいわゆる「デジタルネイティブ」と呼ばれる。多くの子供たちが小学校からプログラミングを含めた情報教育を受け、また多くが小さい頃からスマートフォンが生活の一部、いやもはや体的一部分になっている。あの6インチ程度の箱(正確にはその中に入った SNS などのアプリ)を駆使して人とつながったり、情報を引き出したりするそのスキルには我々は到底太刀打ちできるものではない。特に私は最近と

みに老眼が進んできたので、ますます高解像度になってきたスマホを自由自在に操れる今の若い人たちに羨望とある意味尊敬をもって接している。彼らは、場合によってはいわゆる長編映画も「普通に」スマホで楽しめてしまう種族なのである。

ただ、昨今の彼らの(今時の言い方を借りれば)「デジタル無双」っぷりに対して、少し違和感、あるいは行き過ぎでは、と感じるところもある。1つ目は、彼らのデジタルス

キルはどう見てもパソコンよりも明らかにスマホ寄り(「スマホ依り」といった方がよいかも)であり、前々からわかりきっていることだがスマホへの依存性が致命的に高いことだ。

もちろん、そこにはもう今の時代できないことはない、というスマートフォンの驚くべき進化があり、私もその恩恵にあずかっている1人なので彼らの気持ちもわからないではない。

例えば授業内での学生のふるまいで言うと、まず私の授業には必ず辞書を持ってくるように言っているが、2分くらい紙なり電子なりの辞書と格闘した後、一言「辞書に出ていません」とのたまひ、その後(恐らく彼らにとっては無意識の行動なのだろうが)スマホに手を伸ばして、私に制止される、という場面が幾度となくあった。(ちなみに授業中のスマホ使用は禁止である。)いつもスマホという神が何でも解決してくれるので無意識に脳がスマホに手を伸ばすのだと思う。

また、それに関連することでもあるが、最近ライティングの授業でスマホ上で長文をGoogle翻訳やLINE翻訳などにかけて、作文用紙にそれを写している学生に何度か遭遇した。それに対しては、「それはあなたの作文ではないですよ。」と優しく諭すようにしている。授業中辞書を引きながら英文を組み立てるのはむしろためになると思っで奨励しているが、特に資格試験(IELTSなど)の作文の練習で翻訳アプリを使われると、いくらDeepLのような優れたツールが出てきているとはいえ、何のための練習なのだろうと思わざるを得ない。

私はゼミを持っていないので、詳しくは

わからないが、最近の学生さんたちはレポートどころか卒論もスマホだけで書き上げることが不思議ではないらしい。それも入力手段がフリック入力か音声入力だそうである。確かに最近ではLINEなどのSNSも従来文字や絵文字を貼り付けていたところに音声を貼り付けて会話するのがトレンドらしい。そのうち修論や博論もスマホで仕上げる人が出てきたり、最終的には文字のなかった古の時代に戻ってしまったりするのでは、と心配性の私は気が気ではない。ちゃんとした論文がそれで書けるのであればもちろん文句はないのであるが。

調べもの1つ取ってみても、昔とは文化が違って来た。私もそういうところがあるので人のことは言えないが、今の学生さんは調べものというと専らWeb上の検索ということになる。図書館に入り浸って、あるいは場合によっては図書館をはしごして、ということはどうやらあまりやらないらしい。結果的に、彼らの調べ物は検索エンジンのAIによる優先抽出や、Wikipediaなどの限られた媒体の情報に左右されてしまうので、どれも似通ったものになってしまう。これはネット上の情報を一字一句コピーするという問題にもつながるし、何より曲がりなりにもある程度出版元が信頼性を保証してくれている紙の出版物に比べて、Web上には信頼性の担保されていない雑多な情報が無数に入り混じっているが、そこから選別眼もなく適当に捨ってくることの危うさもある。

もう1つだけ、彼らのデジタル行動について違和感を持っていることがあって、それは彼らがオンデマンドの講義や映画・ドラマなどの映像作品やWeb上の動画などを

いわゆる「倍速」で視聴することである。最近では映画などを何分の1かにダイジェストした動画なども人気らしい。最近の彼らが重視するのは「コスパ」ならぬ「タイパ」(タイムパフォーマンス)というものらしく、彼らにしてみれば映像作品にせよ講義にせよ、内容はすべて理解しているので何が悪い、ということらしいが、作品を作った監督や演じている人々にしてみれば、意図した間合いなどを無視して視聴されていることになり、それで果たしていいのか、と思うし、私もオンデマンドで学生が理解しやすいようにゆっくり説明しているのにそれを倍速で見られたらあまり気分のよいものではない。

以上、結局授業がらみのいつもの愚痴になってしまったが、私よりデジタルスキルの高い若者たちに対するおじさんのひがみだと思って読んでいただければ幸いである。ネガティブトーンに終始して終わるのも何なので、最後にアナログの復権的なものを少し書いておこうと思う。音楽や音声を記録するメディアとしては、主に昭和の時代

のレコード、カセットテープというアナログメディアからデジタルのCD・MDなどを経て、現在はダウンロードやストリーミング(サブスクリプションも含む)を通じたデジタル媒体が主流になっている。つい最近、TSUTAYAが中古CDの買い取りを終了することが発表され、メディアの移り変わりを感じさせる。CDがアイドルの「推し活」以外であまり買われなくなり、CDに付属してくる「ライナーノーツ」という文化がなくなってきたことが惜しまれている。一方で、ここにきてアナログ媒体であるレコードやカセットテープがかなりのブームになっており、国内外で新譜がそうしたアナログメディアでリリースされることも結構あると聞く。あのアナログ特有のまろやかな音、そしてレコードをかけた際のチリチリといった何とも言えない心地よいノイズに若い人たちも含め改めて魅力を感じてもらえるのであれば、昭和の枯れオヤジの私としてもとてもうれしいところである。

(成蹊大学教授)

第19回 年次大会報告

2022年6月11日(土) 13:00-18:00

於: Zoom ミーティング

※基調講演の要旨は、大会要綱を転載しております。

基調講演

文学作品も英語学習に —英語文体論的観点から考える作品の味わい方— 質と量は両立するのか

倉林 秀男

大学や高等学校、中学校で扱う教科書には「物語」や「文学作品」を題材としたテキストが含まれていることがあります。しかし、授業時間内では十分に隅々まで読み解くことができないという実状もあります。物語や文学的テキストは、表面的な意味を読み取り、内容を把握して終わりにするだけではもったいなく、徹底的に活用し、「読む」「味わう」ことの喜びを学習者が得られるものです。本講演では、正確な内容理解のための文法的な知識や気づき、さらにテキストが何を伝えているのか、伝えたいのかについて考えることの重要性をお示しできればと思っています。

東京都ではスピーキングのテストの結果が調査書に記載され、都立高校入試の判定の一部に用いられることが予定され、大学入学共通テストでのスピーキング試験の導入を巡る一連の議論などに代表されるように、今日の英語教育に関する言説は、口頭での英語の産出にシフトしていくべきであるという傾向にあります。特に口頭での産出

は、話し手と聞き手との間にある社会的な関係性を考慮しその場の状況を判断して適切な表現を選択して発話するという一連のプロセスを瞬時に行わなければなりません。

また、聞き取りも同様です。相手の発話内容について、発話された直後から解釈を行わなければなりません。もちろん字義通りに受け止める場合もありますが、言外の意味まで理解しなければならないという場合もあります。こうした高度な処理をできる限り意識化せずに行うには、豊富な語彙力、文法力が備わっている必要があります。

さらに、発話される状況の認識、語用論的知識の活用といった「文脈を読み解く力」も必要となります。しかし、瞬時に行われる発話練習や聞き取りの練習の繰り返しに加え、「じっくり、立ち止まりながら、時には戻ったりしながら」思考を鍛えていく練習も文脈を読み解く力を涵養していくには必要になるはずです。「じっくり、立ち止まりながら、時には戻ったりしながら」思考を鍛えていく練習に適した文章のジャンルの一つ

として、文学作品もあると考えています。そして、読解の方法として「文体論」が寄与できることもあります。そこで、本講演では具体的なテキストを示し、さらに授業で行っていることを紹介、報告をしながら、文学作

品の英語教育への活用についての一例を示すことができればと思っております。

(杏林大学教授)

基調講演

新しい学習指導要領と観点別学習状況の評価

馬場 哲生

現在、日本の英語教育は改革の真っただ中にあり、国の諮問機関などから矢継ぎ早に様々な提言が出され、それらが教育政策に反映されつつあります。2011年6月には「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」において、国民の英語力向上と英語教育の改善が謳われ、2013年12月には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」において、英語教育の改革ならびに教員の指導力・英語力の向上などの指導体制整備の指針が示されました。

2020年度からは小学校において新学習指導要領に基づく教育が全面実施され、教科としての「外国語」が誕生しました。2021年度からは中学校全学年において、2022年度からは高等学校1年次において新指導要領に基づく教育が行われています。中・高等学校ともに、同じ授業時数のままで学習内容が増加しており、加えて高等学校では科目の再編が行われました。指導要領の改訂に伴い、学習評価の枠組みにも大きな変更があり、従来は各教科ごとの裁量が認められていた評価観点の設定が全教科共通のも

のとされ、小・中・高等学校ともに、すべての教科において「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価を行うことになりました。そして、国立教育政策研究所による『学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編』(2019年)、同『高等学校編』(2019年)、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料：中学校 外国語』(2020年)、同『高等学校 外国語』(2021年)において、評価の在り方の具体が示されました。

本講演では、前半で外国語(英語)の新学習指導要領について、後半で新しい観点別学習状況の評価についてお話しします。前半では、「昭和22年学習指導要領英語編(試案)」から新指導要領に至るまでの戦後の歴史の変遷を概観した上で、現行版の位置づけと特質を明らかにし、今後の課題について考察します。後半では、1948年の「学籍簿」から今日に至るまでの観点別評価と評定の歴史を概観し、観点別学習状況の評価の在り方と今後の課題について考察します。

(東京学芸大学大学院教授)

第 80 回定例研究会報告

2022 年 9 月 10 日(土) 14:30 – 17:00

於：成蹊大学 と Zoom ミーティングでのハイフレックス

研究発表

英語嫌いを作らない入門期の手書き文字指導 —フォントと書き順の視点から—

鹿住 尚子

筆者は千葉県内で子ども向け英語教室を始めて 17 年となるが、小学生のみならず中学生でも単語を書く際に、b と d を間違えて書いてしまう生徒が少なくない。また、学校の教科書や市販の英語学習教材を見ると、様々なフォントが使用されており、これも英語初学者にとっては混乱を招く一因になりかねない。アルファベットは漢字などと比べるとシンプルなため、従来は書字指導の方法についてあまり具体化されていなかったが、改めてその方法を検討する必要性があると感じ、本研究に至った。

小学校国語科の第 1・2 学年の書写指導においては、筆記用具の持ち方をはじめ、文字の長短や方向に留意するなど細かく指導のポイントが記載されている。しかし、同じ国語科での第 3 学年のローマ字学習では全く具体的な書字指導については触れられていない。小学校外国語科第 5 学年の「書くこと」においては、「紛らわしい形などを意識させたりするなど、指導の工夫をする必要がある」との記載があるものの、ローマ字学習同様に指導方法の記載はない。

英語を母語とする国での指導を調査した結果、イギリスではナショナル・カリキュラ

ム中の Handwriting の項において、アルファベットを筆法によってグループ化して指導をすることが明記されていた。また、左利きの児童に対しての配慮の必要性などにも触れられている。アメリカでは、インターネット上に数多くのホームスクーリングを実施している教師の自作の教材が存在し、その中には、b と d を指導する為の教材も数多く存在していた。b と d の混乱は、ディスレクシアの児童のみならず英語初学者にも生じやすいため、区別するポイントなどを書字指導の際に伝えることは有益だと考える。

これらの調査を踏まえて、2021 年 10 月に自身の英語教室において、小学 1 年生～6 年生を対象にジョリーフォニックスの指導を援用した b と d の書き方の指導を行い、指導の効果測定を試みた。今回は、児童英語講師の川島章子氏が作成したワークシートを使用して指導を実施し、指導後にアンケートを行った。その結果、児童の気づきとして、「b と d は似ているので間違いやすい」

「絵があるとわかりやすい」「書き方（一筆書き）によって早く書ける」などがあげられた。また、b と d を書く様子を分析したと

ころ、興味深い結果が出た。それは、bは教科書で推奨されている縦棒から書く児童がほぼ9割いたのに対して、dは教科書では楕円から書く書き方を推奨しているが、実際はbと同様にdも縦棒から書いている児童の割合の方が多かったということである。これがbとdを混乱して書いてしまう要因の1つになっている可能性が考えられる。

アルファベットには決まった書き順がな

いと言われているが、アルファベットを初めて学ぶ際に書きやすい方法を明示することは大切だと考える。また、一筆書きで書けるものは一筆で書くこともあわせて伝えていきたい。

(和洋女子大学大学院人文科学研究科
英語文学専攻)

研究発表

Development of a Scale to Measure Questioning Skills

Keisuke MURAHATA

村端 啓介

Questioning behavior of Japanese English students was examined using a Questioning Skills Scale developed by exploratory factor analysis with an aim to create a pedagogy for encouraging better questioning behavior. The Questioning Skills Scale (QSS) was designed for this study to understand which skills are used by good questioners to develop ways to enhance these skills. The analysis revealed three factors related to questioning: communication skills, seeking skills, and metacognitive skills.

Some researchers noticed that Japanese students ask questions in class less frequently compared to native

English speakers (Shibata, 1991; Higashitani, 2007). It was hypothesized that Japanese learners have negative images of questioning (Sukemune, et al., 1996), leading to the idea that Japanese learners avoid questioning even when they may benefit from asking. Using questions effectively is essential to facilitate learning (Yip, 2004) and to deepen thinking (King, 1995, Michida, 2021). As language teachers, it is vital to teach students how to formulate questions and have the confidence to ask them to get the necessary information. The three factors identified in the current study help address these issues

concerning questioning behavior.

In a preliminary investigation, 81 fourth and fifth-year students studying at a national institute of technology were asked, "What kind of person do you think has good questioning skills?". Based on their answers, items for the main investigation were created in the form of the Questioning Skills Scale. In the main investigation, 161 second-year students at the same school participated, and exploratory factor analysis was applied to their answers. When analyzing, some items were excluded because of the ceiling effects, lower commonality, and factor loadings. As a result, three factors were found ($a=0.877$, Overall MSA= 0.86). They are communication skills ($a=.817$), seeking skills ($a=.827$), and metacognitive skills ($a=.693$).

The three identified factors show the three skills good questioners need. One element that constitutes a question is the presence of an interlocutor (Minami, 1985), so enhanced communication skills

would enable learners to use questions more effectively. Also, Dillon (1998, 2004) insists that a sense of uncertainty is the first step to generating a question, so a strong desire to seek certainty is crucial. Lastly, we need advanced cognitive ability to improve the quality of questions. To conceptualize and analyze information gathered from outside myself, we require higher metacognitive skills to help us formulate and improve the quality of their questions. All three identified skills were necessary to become a successful questioner.

Developing practical pedagogical applications to reinforce these three factors/skills found in this study will foster better learners and thinkers. Further research should explore questioning skills in greater depth in the future and develop techniques for improving these skills.

(有明工業高等専門学校講師)

講演

日英語の伝統色名に見られる多様な相違

吉村 耕治

色名とは、色に与えられた名前、色の名前を意味する。日本語では「色名」と「色彩語」とを区別することが容易であるが、英語ではこれらの二表現を区別することが極めて困難である。この点にも日本語と英語の言語文化論上の違いが見られる。

すべての「色名」は、「地名」や「校名」と同様に、名詞であるが、「色彩語」には名詞だけではなく、形容詞や副詞、動詞も含まれる。英語の **green** の場合、形容詞・名詞・動詞用法があるが、日本語では形容詞では「緑の」、動詞では「緑にする／なる」のように「緑」のあとに、「の」や「にする／なる」という付加語が必要になる。

古代日本語の色名は、シロ、クロ、アカ、アヲの四色のみで、シロは顕、クロは暗、アカは明、アヲは漠を原義にしている。日本語では青が基本四色の中に入っているが、英語では **green** のほうが古英語期より用いられており、**green** が **blue** よりも先に基本色名になっている。古英語に存在した青色は「暗い青」（**dark blue** を表す **blæhæwen**, **blæwen** など）のみで、英語の言語資料に「明るい青」が現れるのは、1203年の初出例とされる **blue** が、古フランス語から借用された時である。

日本語の基本色名が五色の場合は、白・黒・赤・黄・青を表し、基本四色に黄が付加されるが、七色の場合は、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫を表し、橙・緑・藍・紫が付加され、有彩色のみが用いられている。

英語では虹の七色が、**red, orange, yellow, green, blue, indigo, violet** と表現され、各色名の頭文字を順番に並べて、“**Roy G. Biv**” という人名形式で記憶されている。

日本語では紫色を用いるが、英語では **purple** (赤紫色、深紅色；日本語の紫色よりも赤に近い色) ではなく、**violet** (スミレ色、青紫色) を用いるという色彩上の相違が見られる。さらに、虹の七色を記憶する方法が、日本語では「せき・とう・おう・りよく・せい・らん・し」と音読みで覚えるが、英語では人名表記で記憶されている。この日本語と英語の違いには、日本語の状況中心表現を好む傾向と、英語の人間(行為者)中心表現を好む傾向とが反映されている。

日本語の色名は四色基軸の時期を経て進化しているが、英語の色名は **black** と **white** の二色に **red** を加えた三色基軸の時期を経て進化している。また、日本語の「紅白」は、英語では“**red and white**”と訳されており、「紅」の意味が十分に反映されていない。「白黒」は、英語では“**black and white**”と表現され、白と黒の重要性の程度にも日本語と英語の違いが見られる。

青と **blue** の間には、象徴的意味の違いが見られ、**blue** には、“**blue film**” のように「みだらな、わいせつな」の意味が見られるが、日本語では「みだらな」の意味ではピンクが用いられる。英語の **pink** は、健康的なイメージを持っている。

また、「明るい青」は“light blue”と表現されるが、「明るい青色光」は“bright blue light”、「明るい青色の目」は“sapphire blue eyes”と表現され、英語では名詞表現に応じて形容詞が変化することが多い。ここに英語の名詞中心構造の特徴が反映している。

現代英語の brown は、印欧祖語の *bher- (bright, brown) に由来し、ゲルマン祖語*brūnaz から来ている。この brown の語形は、byrnan (to burn; 燃える) の過去分詞形 burnen (burned; 燃えた) の音位転換によって生じた古英語 brūn から来ている。英語の brown は、茶色だけではなく、黄色から黒に近い色までを含む。それに対し、褐色は黒みがかかった茶色を表す。

英語の purple は、ラテン語の purpura (shellfish yielding purple dye; 紫色[深紅色]の染料となる貝) の借用語で、古英語の purpre から来ている。red と blue の中間の色で、すみれ色 (violet) よりも赤みが濃く、意味領域が広い。日本語の色名の「むらさき (紫)」は、ムラサキの根で

染めた色を表す。乾燥したムラサキ科の多年草植物の根は、シコン(紫根)と呼ばれ、昔は紫色の染料として用いられていた。

赤という漢字は、「大」と「火」の合字(会意文字)で、「大」は、手足を広げて立つ人を正面から見た形を表している。その「大」の下に「火」を加えた形が「赤」で、穢れを祓い清める儀式を表すと考えられている (cf. 白川静 2003, 2012『常用字解』第2版、平凡社、p. 394)。このようにそれぞれの色名には、その色名を使う人の心(想い)が反映されている。そして、色名には私たち、人間と同様に、良い意味と悪い意味の両方の意味が必ず含まれている。

日本語の色名は、濡れて一瞬、艶を帯びたカラスの羽を表す濡羽色(ぬればいろ)のように、主観的表現構造の色名が発達している。英語の色名は、古英語の geolurēad (reddish yellow)のように、古英語期より分析的表現構造の色名を発達させている。

(関西外国語大学短期大学部名誉教授)

事務局だより

1. 会費納入・名簿整理について (重要)

会費の納入をお願いいたします。本学会では2020年度より会費納入は銀行振り込みに限らせていただいております。なお、お振込みにかかる手数料は会員のご負担になりますので、ご了承ください。お振込み時に発行される「控」が領収書に代わるものとなりますので、改めて領収書は発行

いたしません。研究費処理などで問題が生じた場合には、本学会 HP の「会則」第5条をご覧ください。幸いです。

<http://language.sakura.ne.jp/ajelc/doc/kaisoku.pdf>

書面での領収書が必要な場合は、事務局までご連絡をお願いいたします。

一般会員 4,000 円
学生会員 1,000 円 (院生を含む)
賛助会員 8,000 円

銀行口座：三菱 UFJ 銀行
国分寺支店 普通 0132870
口座名：日英言語文化学会事務局

2. 名簿記載事項について (重要)

名簿記載事項に変更がある方は、事務局までお知らせください。特にメールアドレスを変更されている場合は、すぐに事務局 (ajelc@hotmail.co.jp) までお知らせください。事務局から案内や Newsletter をお送りするたびに、宛先不明で戻って来ってしまうメールが複数ございます。ご本人からお申し出がない限り、新しいアドレスにお送りすることができません。どうぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

3. 第 81 回定例研究会

第 81 回定例研究会を次の要領で開催いたします。

日時:2022 年 12 月 10 日(土)14:30-17:00

場所：成蹊大学・Zoom ハイフレックス
14:30-14:40 会長挨拶

14:40-15:10 研究発表 1

「英語科と国語科の連携を視野に入れたローマ字指導の一考察」

堀 由紀・アシュール 真弓 (和洋女子大学大学院科目等履修生)

15:15-15:45 研究発表 2

「be 動詞と一般動詞の疑問文の相違について—統語論・母語獲得の考察を基に、ラベル付けアルゴリズムから主要部移動を考える—」

根本 貴行 (東京家政大学准教授)

15:45-15:55 休憩

15:55-16:55 講演

「英語教育におけるユニバーサルデザインを考える」

拝田 清 (和洋女子大学教授)

16:55-17:00 諸連絡

4. 月例研究会 発表者・講演者募集

月例研究会の発表者および講演者を随時募集しております。自薦他薦は問いませんので、事務局までお知らせください。なお、発表は会員の方に限りです。

編集後記

この度も先生方のご協力により、無事にニューズレター64号を発行することができました。原稿をお寄せいただきました先生方に心より感謝申し上げます。日一日と寒さが募ってまいります。どうぞご自愛専一にお過ごしくださいませ。(C.Y)

AJELC Newsletter 第64号

2022年11月20日 発行

発行人：小川 貴宏

編集：日英言語文化学会 (AJELC) 広報通信委員会 水澤祐美子・山崎千春・青木理香・江連敏和

発行所：日英言語文化学会

(〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1 帝京科学大学 馬場千秋研究室内)

E-mail: ajelc@hotmail.co.jp